# 香葉

1995　　NO.24

# 目　次

講演会への御案内……1
会長あいさつ……古　城　房　子……2
学長あいさつ……小　玉　敏　子……3
女専のページ……大　金　津　義……4
覚え書　－22－……上　市　二　郎……6
最終講義を終って……小　滝　奎　子……11
大庭みなこ講演会（要約）……可　部　明　子……12
お元気ですか……湊　　井　東……14
第３回奨学生……15
図書紹介……手　嶋　登志子……16
香葉室……17
訪問記……21
クラス会報告……22
国文科30周年の集い……25
母校ニュース……26
決算・予算……27
賛助金報告……28

表　紙……関　　頼　武
カット……漫画研究部

－「ドヤ」街の医師－

# 『佐伯輝子先生　講演会』

日雇労働者の町、寿町の診療に携わっておられる佐伯輝子先生にお話を伺います。ご期待ください。

テーマ：『女赤ひげといわれて16年…』
（寿町診療日記より）
日　時：1995年11月５日（日）
13：30～
場　所：図書館棟５Ｆ視聴覚教室

〈講師の紹介〉
東京神田に生まれる。
東京女子厚生専門学校卒業
東邦大学医学部〔内科（薬理学）専攻〕
寿町勤労者福祉協会　診療所所長
南部市場佐伯診療所所長
吉川英治文化賞。厚生大臣賞受賞。

〈主な著作〉
○女赤ひげドヤ街に純情す
○ドクトルてるこの聴診記

今までの講演・演奏者名です。（敬称略）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1985 | 永井　路子 | 1990 | 吉武　輝子 |
| 1986 | 鳥飼玖美子 | 1991 | 吉屋　　敬 |
| 1987 | 田中喜美子 | 1992 | 円　より子 |
| 1988 | 関東学院中・高等学校ハンドベル・クワイヤ | 1993 | 呉　　善花 |
| 1989 | 宮崎　安子 | 1994 | 大庭みな子 |

## ★香葉会の部屋★ご案内

卒業生と在校生、教職員の交流の場として、又卒業生の部屋として３号館106号室にて、コーヒーとお菓子のサービスをいたします。お友達同志・ご家族お誘い合わせの上お立ち寄り下さい。

※　11月４日・５日　　両日とも開室いたしております。
※　クリスマスツリー・小物等の販売もいたします。

# 香葉会から

会長　古城房子

今年は、戦後五十年に当り、各地で種々の行事や追悼式も行われるようです。男子校であった関東学院に初めて女子教育を目的とした専門学校が設立されたのが、昭和二十一年（一九四六年）ですから、来年が開校五十周年になります。正に日本の戦後の歴史と共に歩んできた短大でした。専門学校が短大に移行したのが一九五〇年、その一期生であった私にとって、この歳月は誠に感慨深いものがあります。あと五年で今世紀が終り、二十一世紀を迎えることになりますが、果して日本は、世界は、どのようになっていくのでしょうか。最近の情勢をみますと、決して輝かしい未来は期待できないように思えます。今年は一月の阪神大震災にはじまり、地下鉄サリン事件、オウム真理教の疑惑、ハイジャック事件など、信じ難い深刻な事件が次々に起り、不安な暗い年になってしまいました。就学人口の減少、見通しのきかない不況の中で短大の存続も厳しい時代に入り、先生方、職員の方のご苦労も並大抵ではないと思います。同窓会としても、何らかの形で、学校を支援していきたいと願っております。香葉会も今年は変革の年でした。

十四年間、会にとって初めての専任事務局員として働いて下さった渕上龍美さん（家10）が三月末に退職されました。多くの会員の皆様とおなじみになり、いき届いた心くばりと、誠心誠意会の為に尽くして下さったお人柄によって皆様に親しまれ、事務局を支えて下さった渕上さんを失うことは、大きな痛手でありますが、後任として岡崎敬子さん（国7）を迎えることができ、渕上さんと共にすでに八年手伝って下さっている益昌子さんと、副幹事長の葛城容子さん（国7）の三人で事務局を運営することになりました。又、三年間、名簿作成の為に働いて下さった松本久子さん、長年に亘り会計監査として協力助言をして下さった松本政子さんのお二人も、三月で辞められました。この三人の方に会員一同、心からご苦労様でしたと、心から感謝申し上げます。事務局の部屋も、人がふえ、物がふえ、大分手狭になっていましたが、昨年、学校側のご理解とご協力により、新しい部屋をルッ館の中に提供していただきました。今の処より少し広くなります。学校の費用で室内の防音設備等の整備をして下さっておりますので今年中に移転することになるでしょう。会員の方に気持良く利用していただけるよう、明るい居心地のよい部屋にしたいと思っております。

六月九日に、総会に代る年度委員会が開かれましたが今年の新卒の委員の方も加わって、新しい幹事の増員、監査委員も決まり、今年度の活動を始めることができました。希望をもって気分を新たに、一生懸命やっていこうと委員一同、思っておりますので、会員の皆様にも、お便りや、イベントへの参加によるご協力をよろしくお願い申し上げます。

# 短大の近況

学長　小玉敏子

また、いつの間にか一年が過ぎてしまいました。皆様、いかがでいらっしゃいますか。一月の阪神・淡路大震災で被害を受けられた方もあったのではないかと心配しております。

まず最初に、昨秋の公募制推薦入試合格者の新聞発表に際し、事務処理上の不手際による間違いのため、同窓生の皆様にもご心配やご迷惑をおかけ致しましたことをおわび申し上げます。

人事について申し上げますと、本年三月、林淳三特約教授が退職されました。林先生は昭和四十二年に家政科の栄養学および食品学の教授として着任されましたが、翌年、大学紛争のために相川大学長兼短大学長が辞任されましたので、そのあとを受け、短大の公選最初の学長に就任されました。着任以来二十八年間在職され、その間前後十六年間学長として、数々のご功績を残されました。先生のこれまでの短大へのご貢献に心から感謝し、ご健康とますますのご活躍をお祈り申し上げます。

なお林先生は引き続き、東京にある学校法人彰栄学園学園長兼彰栄保育福祉専門学校校長をつとめておられます。彰栄学園は、関東学院にもゆかりのあるヘンリー・タッピングの夫人によって明治二十九年に創立された保育者養成の学校で、来年百周年を迎えます。

国文科では高橋敏夫助教授が三月に退職され、代わって四月に、それまで非常勤講師として教えておられた富岡幸一郎先生が専任講師になられ、近代文学や比較文学を担当しておられます。先生は中央大学学生時代に『群像』の新人文学賞を受賞されて以来、評論活動を続けておられます。

家政科にも調理学および食物学担当の杉山久仁子専任講師を新たにお迎えしました。横浜国大教育学部卒業、修士課程終了後、東京大学大学院の博士課程を終了された農学博士です。

一九九二年の二〇五万人をピークに、十八歳人口が急減しているうえ、女子の四年制大学志向ということもあり、今年の志願者は昨年の二七・五パーセント少なくなりました。丙午の年に生まれた人が受験した一九八五年にも前年と比べると同じくらい減りましたが、あのときは、翌年の十八歳人口急増、本学の臨時定員増などのお陰で、翌年は挽回しました。今回は、来年ただちに受験生を増やせるかどうかわかりませんが、短大をより魅力的にする努力は続けたいと思います。

アメリカ・バプテスト婦人ミッションの援助を受けて、昭和三十九年に建設された第一ルツ寮を改修し、集会室、学友会室、部室等に使えるように致しました。名称もルツ館と変えました。香葉会の部屋もそちらへ移ります。古い建物ですが、寮生にとっては懐かしい場所だと思います。

来年は、短期大学の前身、女子専門学校が開設されてから五十年になります。記念式典、記念誌発行、講演会、コンサートなど行いたいと思っております。

当分、短大にとって厳しい時代が続きそうでございます。引き続き、ご支援下さいますようお願い申し上げます。

# 女専のページ

## 日本人形と私

大金　津義

私がアメリカの老人ホームで日本人形教室を開いたのは、中学校教師を定年退職した翌年、一九九二年の夏のことであった。ミシガン州にあるカラマズー市と、静岡県沼津市とが姉妹都市提携を結んでから三十余年になるが、私は当初から英語を通して提携事業と深く関わってきた。そんなご縁から、一九七六年、アメリカ独立二百年祭の年、私はカ市に招待されることになった。当時、アメリカを訪れる日本人は、アメリカから何でもかでも持ち帰る時代であったが、私は、日本を正しく理解してもらうために、日本から何かを持ち出すべき時が来ていると考えていた。

丁度その頃、日本人形を作る老婦人と知り合った。そして、私は、日本人形さえあれば能、歌舞伎、友禅染、西陣織等々、日本の伝統芸能や工芸は勿論のこと、日本人の生活様式、教育、宗教、歴史…多面にわたり、日本を紹介できると直感したのであった。早速、私の人形作りは始まり、作品のいくつかは、海を渡って行った。そこへ老人ホームに住む友人のスー女史を介して人形教室の話が舞い込んで来たのである。

五十数エーカーという広大な土地に建つ老人ホームは、町中にあっても大自然の恵みを満喫できる。名も知らぬ多くの種類の鳥たちが樹々の間を飛び交い、芝生の上でリスたちと仲良く遊ぶ。朝毎に森の中に分け入り、赤や黄色や紫に実った木苺を摘み食卓を潤す。夕には、遅い日没を待ち切れずに飛び出した無数の蛍が、目の前を乱舞する。

私に与えられた部屋は、十五・六畳はあると思われる寝室と、ほぼ同じ大きさの居間、勿論台所、バス、トイレ付きで、家具はすべて王朝風の重厚感溢れるものであった。広々とした長い廊下はギャラリーそのもの。若かりし頃の思い出の写真、絵、詩、手工芸品、等々実に美しく飾られていて、一週間かけても見きれるものではない。時には自分の菜園で採れたトマト、きゅうり、花などを並べて「どうぞ、お持ちになって」と言かれていることもある。豪華なシャンデリアが揺れる食堂では、ボランティアの大学生が満面笑顔で「有難う」に「どういたしまして」と答えている。男性はスーツ、女性は赤やピンクの赤るい色のドレスで夕食のテーブルを囲む。訪れた家族と会話を楽しむテーブルがそこここに見られる。いやでも食は進み、誰もが幸せそうであった。

私の人形教室は、このようなパラダイスではじまった。ホームは外部との交流を常としているので、ホーム外から参加する若者もいた。しかし、老若を問わず、見知らぬ世界への挑戦は容易ではなかった。先ず文化の相違は指貫であった。私は日本式の輪になった指貫を中指にはめ、針の頭を指貫に当て、布を両手の親指と人差し指にはさんでぴんと張りチクチクと縫いはじめると、「まるで魔術師だ！」「信じられない！」という聲々々。それもその筈、彼等の指貫は、指の先にちょこんと被せる例の代物であった。だから私のように針を運ぶことが出来よう筈がない。一針また一針とすくい縫をする彼等は、さぞや辛い仕事と思ったことであろう。

一方、「日本文化の紹介」と大それた考えで乗り込んでいった私も、悪戦苦闘の日々であった。四十年間「英語」で御飯を食べてきたのだから、誠にもって恥ずかしい話であるが一つだけ大爆笑のネタをご披露することにしよう。ようやく人形の着物が完成し、ボディを板の台に立てる時のことであった。台に錐で穴を開け、そこに人形の芯となっている針

金を通して、台の裏側で折り曲げ、人形を固定しなければならない。そして針金が台から出っ張らないように、彫刻刀で小さな溝を作るため彫刻刀を借りたかった。ところが「彫刻刀」を英語で何と言うか、私は知らなかった。彫刻（carve）をする刀だからcarving knifeと言えば通じるだろうと考えて自信を持って言ってみた。突然教室はざわつき、何のために必要なのかと言う。私は身振り手振り図解入りで説明すると、それはchiselと言うのだと教えてくれた。そして、carving knifeとは肉を切るためのナイフであるということも。大爆笑で一件落着したのであった。

二ヶ月かかって作り上げた人形は小さな小さな人形であったが、完成の喜びは大きかった。私が教室の合間を縫って作り上げた「羽衣」「手習子」「京人形」と歌舞伎から題材をとった三体の人形を混えて、作品展が賑ぎ賑ぎしく開催された。思い思いのポーズで踊る人形は愛くるしく、まるで幼稚園のお遊戯会を見る思いであった。集った人々に、見たこともない日本の着物を、苦労して縫い上げた話を誇らしげに語る人、私のおぼつかない英語の説明から得た「日本人の心と人形」の知識を得意げに語る人の姿があった。

最高齢で参加した九十歳のハゼルが、自作の人形を胸に抱いて昇天したとのニュースが私のもとに届いたのは、私の帰国後二ヶ月目のことであった。彼女の残した人形は遺族に引き取られ、私が作った三体の人形は、老人ホームに新築されたホールの特別展示コーナーに納められたことも書き添えてあった。

私の人形教室は、ここで終りと考えていたが、その後、沼津に在住する外国人が弟子入りを望み、週一度の教室を続けている。アメリカ人のウェンディは、「鏡獅子」と「京人形」を、オーストラリア人のアントンは、サンダイ、マンダイとオーストラリア訛りの英語で大騒ぎをしながら「猩々」と「手習子」を作り上げて既に帰国している。目下、アメリカ人一人、カナダ人二人が、私の手造りの日本食を賞味（？）した後、人形作りに勤しんでいる。日本に住んで三年目になるカナダ人たちであるが、日本人の家に招かれて、日本人の生活を直接見聞するのは、私の家が初めてだという。そこで、私の仕事は人形だけではなく、日本食の料理法、着物の着付、文字の読み書きと意味に至るまで、多岐にわたっている。

残念なことに、私は近い将来、人形作りを止めなければならないかも知れない。私の情熱がさめたわけでもなく、健康上の理由でもない。それは、材料の入手が不可能だからである。人形材料の世界にも後継者がなく、本物が消えて、プラスチックス、ナイロン等の石油製品が取って代ろうとしている。例え人形といえども、ナイロンや、ポリエステルではなく、正絹の着物を着せてあげたい。京友禅で染め上げた正絹の衣装を着た「藤娘」や「火炎太鼓」を作りたくても、もう染めているところはないという。その他の髪飾りや小物類も無い無いづくしでは仕方ない。

もう一つの悩みは、私の家にある正絹の衣装をまとった二十数体の人形の「行く末」である。独り暮しの私の死後、これらが散逸したり焼却されたりすることを、私は恐れている。なぜなら、私の作品は決して良い出来ではないが、焼いてしまえば、再び本物で作ることが出来ないからである。幸いなことに、姉妹都市カラマズー市が、私の寄贈の申し出を快諾してくれた。今建設中の新しい美術館の一隅に展示される予定だという。

私が初めに直感した「日本の紹介」は、あまりにも大きな仕事で、私の力では到底成し得ないが、私の人形や、教室で学んだ人たちが、その資を果してくれると信じている。

（女専英3回）

# 覚え書（二十二）

## ―女専・短大小史―

上市二郎

平成七年（一九九五）は終戦から五十年という節目の年、内外の色々の情報が耳に目に入ってきます。当時南の島国に在って敗戦の報に接し、日本の地に足が着ける日はいつか？毎日不安だった頃を思い出します。新しい年を迎えて半月程して突然の出来事に遭遇、即ち一月十七日（火）午前五時四十六分、兵庫県南部地震＝阪神大震災が発生した。突然に襲ったこの大地震、会員の中で不幸にも罹災された方はありませんか、心からお見舞い申し上げます。私が数え年五歳の時、大正十二年九月一日の関東大震災を経験しました。非常に恐かった為か七十二年後の今でも細かいことまで覚えています。また地下鉄サリン事件、宗教団体の反社会的な行動並びに事件、何かが狂っているのではないでしょうか。

去る三月二十三日（木）林淳三先生を囲む会が横浜ロイヤルパークホテルニッコーで催され、三月末で学院を定年退職される先生と親しくひとときを過ごすことができまして大変感謝しています。本当に長い間ご苦労様でした。先生のご功績に対し心から感謝の言葉を申し上げる一人です。現在学校法人彰栄学園の学園長並びに校長として重責におられる先生、呉々もご健康にご留意なされて益々のご活躍を心からお祈り申し上げます。願みれば先生が公選初代学長に就任された頃は燦葉会短大部時代で、恒例の三日会を弁天通の真鶴で開き「古米について」と題して先生にお話し願ったのが印象に残っています。時の流れの早いこと…。

さて、前回は昭和三十三年十一月恒例の宗教強調月間について当時の宣教師ジェニングス先生が宗教委員会で大学・短大の種々計画されていたところ迄でした。

十二月に入り、クリスマスは昼も夜も二十日（土）に礼拝を行って、冬期の休業期間は十二月二十二日（月）から翌年の一月九日（金）までとなっていた。毎年の行事の一つにスキー実習があるが、この年は大学体育科の湊、岡村両先生の引率で山形市の蔵王温泉スキー場へ、吉田屋旅館を利用して実習することになった。明けて昭和三十四年一月六日（火）夜出発して十一日（日）の朝横浜へ帰る計画、即ち三泊五日の日程で実施した。当時は交通費と宿泊費で一人二千八百円で、持参品として防水に耐える上着、手袋、肌着、靴下の替え、帽子、サングラス、寝巻、ビニール風呂敷、それに弁当二食、副食、学生証その他、と至れり尽くせりの記載事項だった。参加人員は大学・短大合せて約五十名となっていたが、当時このスキー実習に参加された会員諸氏もいることと思うが、さぞ学生時代の良き思い出として今でも余韻を残していることだろう。

学院の創立記念日は一月二十七日で、この年は創立四十周年に当り、記念式は三春台校地で挙行する番になっていた。教職員の記念祈禱会は午前九時から本館三階の小講堂で行われ、記念式典は十時からグレセット記念講堂（現在はその建物は無く、これについては既に記述している）で行われ、祝会は十二時から例年の如く全学院の教職員の懇親会として開かれていた。大学と同様に短大でも創立記念特別講演会を一月二十八日（水）午後三時からキリスト教研究所講堂に於て開き、この時は「ロマン・ロランの社会思想と宗教」

と題して、兵藤正之助助教授が講演を行った。ところでこの関東学院創立四十周年は関東学院大学の丁度十周年に当るので、記念行事の件に関して考えてみてはどうか、との意見が大学短大運営委員会の一部から出されたが、古い木造校舎ばかりの時代であるので新しい講堂でも、出来た時に盛大に行ったら、との結論になった、とか記録されていた。

再三述べてきたように、この頃は大学校地で校舎も共用という状態で同居人同様肩身の狭い思いでした。そのため短大学長も加わり大学短大運営委員会を作り、その場で検討が重ねられ短大の主張も判ってもらえたのである。その頃は一号館木造校舎に管理部門事務局が入り、（一階に若干の教室は在ったが）業務を行っていた。

二階南側に学院長・大学長室などと並び広報室（講師の控室）大学の教務課などがあって、短大学長室は南西の角、西日の当る下屋的な小さな部屋だった。北側には短大の事務室・学生主事室・音楽室があった。それに続いて大学の宿直室があったが、この部屋を改装して辞書室とすることになった。教員が休憩時間に一寸調べるのにその都度図書館または研究室まで足を運ばなくても要件が済むため講師の方々は大変喜んでいたのを思い出す。これなども運営委員会で決定して準備した。事務員も必要になるので夜間の商工高校の生徒須藤キヨ子さん（現在は柳本に改めて袖ヶ浦市に在住）に在校中アルバイトで手伝ってもらった。また、翌年度の四月から大学の第二部の職制が変更されて、夜間主事に中村邦一教授が当てられ、夜間事務課長に桧垣好子先生のご主人桧垣克雄氏が当てられた。これなども運営委員会で決定して実施されていた。短大の英文科第二部の事務取扱いについても検討されて、後年、夜間の事務も短大第二部係として家政科第六回卒の三宅さよ子（現在は海老沢）さんが、夜間事務課長の下で業務を続けておられたのを思い出した。

この年の三月十七日（火）午前十時からキリスト教研究所講堂に於て卒業礼拝が行われており、説教者は神田三崎町教会牧師の山北多喜彦先生であった。そして卒業式は三月十八日（水）午前十時から挙行されている。その日の役割分担区分が二月四日（水）の会議で発表されている。司式は柴教授、免状係は安藤助教授（学生主事）、卒業者の氏名を呼び上げるのは各科主任、会場係は兵藤助教授、学生誘導係並びに茶話会司会（この頃は式終了後父兄、学生、教員側との歓談のひとときを持った）は大河原助教授、接待係は井口講師と鳥越講師、受付案内係は桧垣助教授と永野講師と記録されていた。続いて行われる卒業晩餐会は三月二十日（金）午後五時からニューグラントホテルで行うとのこと、その夜の司会は小玉講師に決定した。なお、卒業生一同からの記念品贈呈は従来卒業晩餐会の席上にて目録贈呈の形で行っていたが、この年から卒業式中に組み入れ答辞の次に行なうこととなった。この点が変った処だろう。

小玉晃一先生は三月末日をもって退職することになった。新年度四月からは出身母校の青山学院大学で教鞭を取ることとなり、先生は二月二十八日（土）青山学院教会に於て結婚式を挙げられた。この年は閏年に当っていたことを思い出した。

いよいよ昭和三十四年度が始まる。この年度から大きく変ったものは学生寮の件だろう。当時は大学の校地内での生活であったことは周知の事実で、学生募集の広告予算でも単独では賄いきれず、大学の学生募集広告の所に短大の広告を数行便乗させてもらうのが精一杯だった。然し地方への宣伝効果があったのだろう。この年の入

寮希望者が多くて全部で四十名を超える結果となってしまった。幸いにして田中医院（医院は国道十六号線を六浦橋信号で鎌倉街道へ入って二百米程行った右側の所に在った）の別棟が空いているという情報が得られたので、早速桧垣先生が交渉して、それを借用することになった。此処を「第二ルツ寮」と命名して入寮定員十五名で発足した。（ルツ寮についての詳細は短大三十年記念誌の百二十八頁を参照）そして第二ルツ寮の開寮式は五月六日（水）午後三時十五分から約一時間を要して挙行された。

昭和三十二年を最低にして学生数も毎年少しずつ増加していた。学生数の増加に伴って英文科では、第一学年をA組B組のクラス別制を復活して行った。そのためには授業時間も増えて英語担当の先生が急増し、非常勤講師を増員した記録が残っている。また、学年始めでもあるので、教授会でも今までの学年主任制を廃止して、学科主任と相談役の制度を設けることになった。そして、次のように、その年の発令が行われていた。学科主任として、英文科は小玉敏子講師、家政科は桧垣好子助教授、英文科第二部は柴三九男教授、次に相談役としては、英文科は兵藤正之助助教授、家政科は大河原拳之助教授、英文科第二部は兵藤助教授と大河原助教授の二名となっていた。

この頃の記録を見ると四月二十七日（月）午後一時半からキリスト教研究所の講堂に於いて神学部の開学式を行った。キリスト教研究所の授業が文字通り移行されていくのであろう。（関東学院大学三十年の歩みに依れば、昭和三十四年四月、キリスト教研究所を母体に神学部神学科を設置したと記されている）

この年のリトリートは一、二年合同で実施した。日程は五月七日（木）から九日（土）までで、伊豆の天城山荘を使用して行っていた。これについては詳しい予定が四月上旬には発表され各責任者は準備を進めていた。ここで記録して置きたいものを次に掲載しておきましょう。先ず、主題は「宗教は必要か」であった。費用は乗り物から宿泊代総べてを入れて千七百円也だった。七日の午前八時二十分、横浜駅東口に集合した一行は九時近くの電車で一路修善寺へ、修善寺駅前から貸切バスで山荘へ向かった。指導者には坂田祐先生を始めとしてジェニングス先生、山本和先生（神学部教授）、相川先生を始め専任の先生方全員と事務局から若干参加。さて行事についてプログラムを追ってみると、山荘に着いて昼食を取り小休止して開会礼拝、その後、午後二時から四時まで、一年次生は相川先生に依る「学院物語」、二年次生は山本和先生の宗教講演があった。午後六時半からの夕陽会にはジェニングス先生が当たられ、七時からは学友会の時間となって役員の趣向をこらした新入生の歓迎会が行われた。翌五月八日（金）の朝拝は桧垣先生が担当、午前九時からの主題講演は兵藤先生が担当された。そのあと、専任の先生方の数に学生を分割して小人数のグループで、今の講演について分団協議会として昼まで話し合いを続けた。昼食を済ましてからの午後の日程はピクニックとなった。午後六時三十分からの夕陽会は安藤先生、午後七時からは話し合いの時間「こんなことで話し合ってみたい会」と題してグループに分かれて時を過ごした。午後八時半から約一時間新入生歓迎レセプションがあった。明けて五月九日（土）

の朝拝は小玉先生が担当され、朝食後の一、二年交りの会があり、午前九時半から全体報告会をもって各分団での様子や意見が聴ける場でもあった。午前十時半からの閉会礼拝はジェニングス先生が担当された。二泊三日お世話になった山荘へ迎えにきたバスで立ったのは十二時半、一路修善寺駅へ、そして横浜駅へ午後五時三十一分に到着、総てが終了ということになるが、この時に参加した会員の方はさぞ懐かしい思い出として甦ってくることだろう。

新入生の歓迎会をも組み入れら天城山荘リトリートも終了し、例年の大学祭・短大祭は五月二十九日（金）から六月一日（月）まで行われるので、二十八日（木）の午後から六月一日まで休業とする、という公示があった。

前々から折をみては述べているように、少しでも早く我々の城が持ちたい。それが教職員の一番の願いであったからだ。いつまでも甘えた形で大学の校舎を使用しているのでは短大の独自性を打ち出すことも出来ず、女子学生の教育も不可能であると、常々耳にするところだった。それには先立つものの検討が必要で、当時学校法人の財務部長だった荒井先生と懇談する機会が、やっと与えられることになった。私学経営の財源となる学生数も昭和三十二年が最低で段々と増加して昭和三十四年度は三百名以上になっていた。資金面に対する諸問題も何とか切り抜けそうだ、との見通しの上に立って六月二十九日（月）資料を準備して相談することが出来た。それ以後は校舎建築に関する件として、たびたび報告や検討する機会が多くなった。そして翌三十五年の二月頃ともなると、「短大校舎建設問題に関し」として先ず何を建てるか？が討議された。この頃、大学では男子学生が圧倒的に多く、短大の女子学生の憩いの場として使える所が無く、教場や特別教室を使って過ごしていた状態であった。そのために、先ず湯茶の設備のある学生ホールを考え（女子学生のためセルフサービスで充分こなせることが可能だ）家政科は調理室、英文科には語学の演習室等が上げられた。―印象に残っているので八年後のことを少々記しておきましょう。それは昭和四十三年の春、短大本館が増築完成。この時大学は文学部が増設され、女子学生が多数入学し六浦キャンパスに色を添えた。この時から短大に対する風向きが大きく変ったことだ。然し大学には女子学生に対しての諸設備が少ないため文学部の女子学生が流れ込んで学生ホールが喫煙所になるので、良く教職員で注意した―　昭和三十五年二月ともなると短大校舎の建築計画が、より具体的になってきた。昭和三十二年に大学が新しい図書館を完成した時、今までの大学図書館（ここは旧海軍の風呂場を改装した建物）跡をまたまた改装して、家政科の和裁、洋裁の特別教室と華道教室に使用していた。

短大の計画ではこの地にコンクリート三階建、総坪数約四百坪の建物を考え、この年度ではその約三分の一を壱阡萬円位の予算で実施したい。という方針がまとまった。そして第一期建設案としては、一階に調理室、二階は学生ホール、三階には合併教室または学友会部室とする案が出来上がっていた。然し協議を重ねるたびに二転三転した。当時の記録を見ると募金活動も考えられていた。新校舎建設に関し在校生に対しては特別預金制度を採用して一口五阡円とする。そして卒業生は原則として、一口壱阡円で二口してもらいたい。なお、更に短大後援会を通じて大口の寄付をお願いしよう。そのために次のような募金委員を定め協力してもらう。A卒業生関係は兵藤先生、桧垣先生、B在校生関係は安藤先生、烏越先生、C総務関

係としては相川先生と筆者、以上で活動を始めてもらうこととした。

そしてその後の基本設計で一階は学生ホール、二階は普通教室とL・L教室（語学演習室）とその準備室、三階は調理実習室と準備室および試食室、以上が鉄筋コンクリート造三階建、普通教室が一つしか取れなかったので一階学生ホールの東側に中廊下を造り左右（南北）に二教室ずつ四教室を造ることとなった。L・L教室を造るについては設備関係が色々と複雑で配線なども普通教室とは全く異なり床の下に細かく張り巡らされていたのを思い出す。床上の機器設備は日本ビクターで請け負ってもらうことになった。何しろ初めてのことでもあり、設備もしてある大学が少ない頃なのに、もう既に設備して授業に使用している大学もあるので、小玉先生（現学長）と共に津田塾大学やI・C・U（国際キリスト教大学）や、その他の大学（三十五年も前のことでいささか記憶も薄れました）を訪問して機器を取り入れての授業の利点や欠点について、また反省される色々な点、なお教材作りにおいて必要なことなど、それを操作や整備する演習助手の問題にまで及び詳細に亘って熱心に質問していたのを思い出しました。

次に懸案の問題がもう一つある。それは同窓会の件で、旧高等商業部時代から継続されている同窓会即ち燦葉会があるが、短期大学の卒業生もこれに従属していればいいのだ、と当時は考えられていた。六月二十三日（火）の燦葉会評議委員会で議題になり改めて前記のように確認された。そしてこの年の秋の総会から行動を共にするようになった。その後は燦葉会短大支部として独自の活動に入って行ったのである。この頃女専及び昼の短大の有志が自分達の同窓会を作りたいと着々準備をしており八月二十九日（土）には準備委員会を開き、夜間の英文科第二部をも加えることに決議して、九月十二日（土）には改めて合同の準備委員会を開いた。燦葉会会長加藤充三氏と幹事長加用茂氏が燦葉会から出席した。この席で短大支部として活動したい旨の了承が得られた。そして、十一月十五日（日）午後二時から神学部講堂に於て燦葉会短大支部発足記念パーティーが開かれた。それ以後は短大の卒業生が力を合わせ支部長始め各役員が努力して短大支部活動を盛り上げ、そして昭和四十五年からは独立した同窓会「香葉会」として発展して行くのです。翌年の二月には燦葉会の短期大学部会委員が次のように決定し記録されている。委員長田中実子（女専英文科三回卒）、副委員長古城房子（短大英文科一回卒）、書記松岡梅子（短大英文科四回卒）、会計中島充子（女専英文科一回卒）、川勝愛子（短大英文科二回卒）、以上（敬称略）

この年度のシェイクスピア英語劇の公演は十二月十七日（木）に開催していた。演し物は「じゃじゃ馬ならし」だった。（短大三十年記念誌参照）

クリスマス礼拝は十二月十八日（金）第三、四時限を使って行っており、午後は祝会の時間に与えられ、各クラスの有志の催しもので時が流れた。プレゼント（五十円程度の品）の交換会が笑いの中に和やかに過ぎて行った。

この年も十二月には新春早々実施されるスキー実習の計画が発表されており、昨年と同様大学体育科の教員が指導に当り大学と共催で行われることになった。参加の希望者も既に三十五名程申し込みがあり、昭和三十五年一月五日（火）から十日（日）にかけて行うことになっていた。（P14下段へ続く）

# 最終講義を終って

小滝奎子

この三月三十一日、長年勤務した関東学院を定年退職させて頂きました。昭和二十二年九月に関東学院女子専門学校に奉職して以来、途中七年間ほど抜けたことはありましたが、長い年月を無事に楽しく過ごさせて頂いて、今更のように関東学院は素敵なところだったと思い返しています。

退職に先立って一月十七日に釜利谷の文学部の教室で最終講義ということになりました。昭和四十四年以来は大学の文学部の専任でしたから、最終の講義も釜利谷で行われたのですが、当日になってみると、大学でのゼミの卒業生たちに交って、短大の一回生、二回生などの方が大勢来て下さいました。短大の二部があった頃の卒業生の方々も、男子の方たちは少々白髪交じりだったり、既に退職後の生活を楽しんでおられたりのようでした。私もこういう方々の〝先生〟だったのかと、改めて感慨深いものがありました。私がはじめて教師になった頃、短大は小さな学校で、それだけに学校全体が一つの家族のようでした。今でも昔の卒業生の方たちは、妹のような気がします。

さて最終講義の題目は〝ジョージ・オーウェルの未発表の手紙〟というものでした。未発表とは、まだ印刷されていないという意味で、彼の手書きの手紙類を、ニューヨーク市立図書館で私が筆写して来たものがかなりあって、それをもとに彼についてまだあまり紹介されていない部分を扱ったつもりです。

研究という点でも、関東学院にいる間に本当に有意義に楽しくさせて頂きました。大変地味な文学研究の分野ですけれども、それなりに私にとっては意味深いものでもありました。その他にも英文学のあれこれを、心から楽しんで生きて来たというようなわけで、感謝しております。何よりも関東学院というところは、かかわるすべての方々の人柄がよいのです。その上に六浦も釜利谷も風景が美しく、四季それぞれを楽しむことが出来て、とても幸でした。

最終講義が終ったあと、大勢の方々から沢山の花束を頂いて、びっくりしてしまうほどでした。私の人生の最高の日だったのかもしれません。

四月以降どのように過ごしているかと言いますと、先ずは今まで何十年の散らかり放題のもの―書物や原稿や身の廻りの品など―の片付けを目指したのですが、これは私の最も不得手な分野で、いまだに大弱りしています。この件に目をつぶって、つまり放り出したままにしておいて本を読み出すと、これは時の経つのも忘れます。今までの専門分野を離れて、成果を収めるとかはもはや問題にせず、しなければならない片付けもせず、読みふけっている、というわけで、今のところ大層結構な時を過ごしています。

長い間いろいろとありがとうございました。

（関東学院大学名誉教授）

# 大庭みな子先生講演会

## ―「私と文学」―

要約　可部明子（国20）

今日のような講演ではどんな風に小説を書くのかよく質問されますが、文学を特別考えたことはあまりありません。考えてみても、適切な答えはなかなか浮びません。そこで私が幼い頃からどのように過ごしてたかをお話しようと思います。一般に文学論みたいなものがありますが、それは最も非文学的なものだと思います。文学はそういう所には無いものだと思います。私が物を書こうと思い始めたのは物心ついた時でした。自分では覚えていませんが、三歳でいろはを読んだそうです。非常に本が好きな子供で、外で遊ぶことにほとんど興味を示さず、お話の本を与えていれば退屈しない子供でした。兄弟は全員幼稚園へ行きましたが、私は「そういう所には行かない」と言い張って行きませんでした。小学校に入っても本を読むのが一番の趣味で、学期始めに教科書が配られると、一、二日で全部読み、後の一年間は全然見ませんでした。学校では特に問題児ではなかったのですが、授業中教科書以外の本を読んでいました。そんな風でしたから、親から「本ばっかり読んでいないで外へ行って友達と遊びなさい」「誰かと遊びなさい」とばかり言われていました。ところが私は極端に運動神経がなかったもので、外へ行ってもあまり仲間に入れてもらえなかったと思います。それで自分には向かないと思って本を読んでました。子供は残酷なもので、何か出来なかったり、弱い子供はいじめられることが多いのですが、私はいじめられませんでした。それを私なりに分析してみると、誰も興味を持たないことにしか興味を持たず、人と競争する気持が無かったからだと思います。読んでいる本は流行とかけ離れ、自分の世界で満足している子供でした。当時義務教育は小学校までででした。卒業前に将来の希望を記入する用紙が回ってきた時に、私は作家と書き、先生に「どこの学校を受けるかを書きなさい」と言われました。私は特別、どこの女学校へ行こうという気持ちはなかったので、将来の希望が学校のことだとは「変なことを言う先生だ」と思ったことが、強く印象に残っています。その時は何か理不尽なことを言われたように感じたことを記憶しています。物を書く人間になろうと思ったのは、五、六歳の時だと思います。小学校の間中、自分の好きな話を書いていました。

私が小学校に入った年に中国との戦争が始まりました。女学校に入る頃には明らかに負け戦に向かっているとわかり、軍国主義一色でした。私は神話や民話などが大変好きで、世界中の童話をよく読みました。小学校の五、六年位からは一足飛びに大人向けの文学全集を読み始めたので、当時流行していた戦争物は全然知りませんでした。子供時代の一番大きな記憶は、毎朝学校で先生に新聞に出てくる日本軍の戦果を、言わされることでした。皆が手を挙げるなかで手を挙げられずに下を向いていると、「あなたは何も知りませんね」と先生にお小言を頂きました。私も新聞を見なければいけないと思いながら、興味が無いので見ることができませんでした。なぜ興味が持てなかったかというと、学校で強要されることより喜びや

悲しみなど心に訴えてくる小説に書かれていることの方が、遙かに本当だと思ったからです。戦争の戦果を言うことを強要されるのが、子供心にとても嫌でした。女学校の頃には、外国文学を読むことが当局の方針でいけないことになりました。忘れられないことに、先生に「テス」「ボヴァリー夫人」を取り上げられ、ひどく殴られたことがありました。以後注意人物にされました。外国文学を読むことが非国民だったのです。それから子供心に大変用心して、従順なふりをしなければならないと固く思いました。自分に正直にしたら生きてはいけないことを知ったのです。女学校の二年生の時から広島で勤労動員に取られ、十一時間労働をしました。全国民が栄養失調で、毎日頭上をB29が飛び、いつ空襲で死んでもおかしくない時代でした。空襲の時が唯一休める時でどこで死んでも同じと思い、私はなるべく薄い岩波文庫をいつもポケットに入れて、麦畑で読んでいました。国粋主義の時代で日本文学は良かったので、「源氏物語」など頭注だけの日本古典を読み始めました。仕方なく読んだのですが、今は私の財産になっています。私は人には持って生まれた質があると思います。周りは戦争の話ばかりでしたので、最初の学齢期から十年位は同年代の友達に同じことを話せる人はいませんでした。この頃から流行が気にならない癖がつきました。最小限の社会的に生き延びる術を知っていれば、あとは好きなことをするしかないと、六十年以上生きてきてこの頃本当に思います。

戦後の二、三年は一番ひどく飢え死にする人がいました。大学に入学した昭和二十四年、東京は焼け野原でした。食べることが精一杯で、女の子が大学へ行くことは一般的ではなく、私も家中が反対していたので、こっそり大学を受けました。津田塾大学は英語で有名な学校で、先生方に「あなたのようなできない人は、こういう所にはふさわしくありません」とよく言われました。それでも別にあまり気にならず、むしろ四年間は生涯で最も親切にされたと思います。宿題は友達にしてもらって、私はずっと小説を書いていました。塾を卒業したことを言うと英語ができると思われるので、長く言いませんでした。結婚後、一九五〇年代に夫の転勤でアメリカへ行き、それまで文学を発表することを考えたことはほとんど無かったのですが、母が送ってくれた文芸誌に新人賞のことが載っていて、試しに応募して入選しました。文学みたいに百年、二百年の単位で考えるものに流行は無意味です。流行は知っていればいいのです。生きる為に知ることが重要なのです。軍国主義から民主主義へ移り変わり、昨日までいけないことが良くなる時代に人間が鮮やかに変身することを見て、私は自分が本当にこうだと思うことを思う、それが表現だと感じました。

文学で今も残るものは、時代に左右されない人間の感性で描かれてあるものです。いつの時代も作家は本を生き延びさせ、流布させる為に体制に受け入れられる体裁で本をつくりますが、行間には必ず本当の所が書いてあります。筋を気にする方がいますが、プロフェッショナルはあくまでプロットなのです。本当に面白い所は、人間が馬鹿ばかしいことをいかに信じ、苦しめられ、切なく思う姿が描かれている所です。

私は作家になりたいと思っても、商業的に有名になりたいとか、そのために何かしたことは一度もありません。つまり人生とか文学とか、何でもそうですが、小さいことにこだわるよりも、人生そのものの味わい方ということに尽きるのではないでしょうか。

# お元気ですか

湊　井東

この度短大の香葉会より近況を知りたいので原稿をとの依頼を受け恐縮致しております。

私が短大の授業（保健体育）を担当致しましたのは昭和三十年からでした。当時短大には体育の専任者がおりませんでしたので、大学の専任であった私が、講師として担当し、専任として西垣千恵子先生が着任される迄は（昭和四十一年）私は短大の方も専任の様な顔をして勤めておりました。また専任者が来られても学科やクラスが増加したためそのまま非常勤講師として今日まで四十年間勤続致して参りました。

長い年月になりますので親・娘二代に亘って私に教わったという方も結構出てくるようになり、私も自分の年を改めてふりかえる今日この頃でございます。

昨年三月末、四十一年間つとめあげた大学を定年退職しましたが、引き続き特約教授として今では社会学科の専門科目やゼミナール等を中心に週一日四コマを担当しており、また、短大の方も引き続き二コマ担当しております。

いつも二十才前後の若い学生を相手にしておりますので私自身も三十才前後のような気持ちでつとめており、幸い健康にもめぐまれ、今だに学生と共にテニスやバドミントンを行っております。

私が過去四十年以上にも亘ってこの関東学院大学、ならびに短期大学での教育での信条はまさに「体育は人間学である」ということでありました。人間として将来ともにより良く生きるために、健康ですこやかな人生を過ごすことの出来るようにその基礎をつくり上げるのが学生時代であることを強調して参りました。

さて香葉会からのご依頼は近況をとのことでしたので、私の近況としてあえて変ったことと言えば、時間的に大変余裕が出来ましたので、今、一年間コースの料理教室に通っておることでしょうか。

昔、短大の授業での昼休みに家政科の学生が調理の時間に作ったものを持って来て、私に食べてみて下さいと差出されたことが何度かありました。いま料理教室で学んでいて当時の学生の姿が思い出されます。

今まで四十年以上もの教育経験をもちながらも、今回たまたま料理教室の一生徒となってみて、人に教えることのむずかしさを改めて思い知らされている今日この頃でございます。

（関東学院大学文学部教授、同短大非常勤講師）

☆　☆　☆　☆

（P10より）短大からは相川学長と安藤学生主事が付添いとして参加したことが記録されていた。

この年は六浦校地が当番となって一月二十七日（水）に学院創立四十一周年の記念式並びに諸行事が執り行われた。筆者も一九一九年生れのため、この式典に出席するたびに改めて自分の年齢を痛感していた。

昭和三十五年二月一日付にて奥山幸男氏（現在の大河原氏）が事務系職員として採用され、やっと男子職員が二名となった。

英文科第二部のリトリートは今回卒業する二年生の歓送会を兼ねて、二月二十七日（土）から二十八日（日）にかけて湯河原の亀屋旅館を会場として実施。この旅館の社長は大学の前身である高等商業部時代の卒業生で、後輩の計画した行事には大いに協力すると、心から歓迎されたのを思い出した。

# 第三回奨学生

## 卒業にあたって

王　慧　穎

いよいよ、この美しいキャンパスを離れようとしていて、あっという間に短大生活に終止符が打たれます。過ぎ去った二年間をかえりみますと、いろいろな思い出が、苦と楽が、喜びと悲しみが、ひとつの色模様の中に織りこまれて走馬燈のように浮かんでまいります。

無事に卒業ができ、誰よりも、この二年間ずっと見守ってくれた国文科の先生方に感謝の気持ちが一杯です。特に私のクラスの担当、伊東先生が私達留学生に特別な配慮してくださって、勉強にも生活にも大変お世話になりました。

私が短大で学んだ二年間はかけがえのない素晴らしい時間でした。多くの人との出会い、学問との出会い、文化との出会いなど、様々な出会いを通して自分について、自分の生き方について見つめ、考えていくことができました。この学校に入って、本当によかったとつくづく思います。

学窓を出ると言って、学問の終りではないこれからも、積極的に勉強の意欲を持ち、前向きに努力して行きたいと思います。

（国28）

## 名残り惜しい心

秦　烏仁高娃

三月十七日、卒業式がいよいよ目の前に迫って来た。これから自分の努力が世の中に認められるようになるかと思うと気がわくわくして止らなくなる。しかしこの学校を離れることは本当に名残り惜しい。

短大生活は私にとって非常に大切で意味のある二年間だった。日本文学の勉強を通じて私に新しい夢が見え、未知の世界を目指すことができた。

本日、卒業と入学の資格を共に手に入れた今の私は有難い気持ちで胸が一杯である。

最初、不安な気持ちで大学の門を潜った時に先生方の微笑みがとても優しかったことが印象に残っている。それから沢山の日本人の学生と友達になり、一緒に資料を探し、一緒に発表して知らないうちに自分が外国人ということを忘れてしまった。

源氏物語、俳句、古事記、能楽などの古典文学を理解するまで非常に苦労をしたことが思い出される。時には難し過ぎて、嫌になってしまったこともあった。何しろ生活も風土も歴史も全く違う国だから当然だった。今振り返って考えるとこれらは皆とても懐かしい経験であった。

中国の奥地から来た者には女子短大の環境は実に綺麗だった。春の到来をいち早く知らせてくる桜の花、夏の光に輝く緑の芝生、秋の空を彩る楓や紅葉、そして冬でも青々と美しい松の梢。特に桜や楓はきっとますます枝を伸ばして多くの人を楽しませてくれるでしょう。

国文科の先生方、各学科の先生方、いつも私達の環境を綺麗にして下さったおばさん、おじさん本当にいろいろお世話になりました。感謝の気持ちをどう表現したらよいかわかりません。

これからも、もっと日本で勉強することを続けますが「人になれ、奉仕せよ」の方針を生かして行くように頑張りたいと思います。

（国28）

## 図書紹介　家政科教授　手嶋登志子

### 「やさしくつくれる家庭介護の食事」

西原修造、田中弥生著（日本医療企画刊）

長寿社会を迎えた我が国では、今、〝寝たきり〟や〝ぼけ〟などで介護を必要とする高齢者（要介護老人）が急ピッチに増加しています。〝たとえ病気や障害を持っていても、長年住み慣れた自分の家で家族と一緒に暮らしたい、暮らさせたい！〟という高齢者や家族の願い、あるいは、これまでの長期入院高齢者を在宅での医療へ、という施策の推進によって、家庭介護の重要性が急増しているのです。

しかしながら寝たきりや痴呆をもった虚弱な高齢者を家庭で介護できる〝受け皿〟はまだ不十分で、多くの難問を抱えております。

特に、家族と同じ食事を食べられないような、咀嚼や嚥下機能に障害のある高齢者の場合などがその例です。そのためには、このような高齢者の食事をどのように作り、どのようにケアをしたらよいか、というマニュアルづくりが必要となります。

そのような要請に応えて、タイムリーに素晴らしい本が発刊されました。

…かわいい食器に彩りよく盛られた食事、これが流動食？と思わず目を疑いたくなるようなきれいなカラー写真付きで…

〝家庭で作れるアレンジ料理、一口懐石としの応用例、お粥の応用料理、お年寄りに喜んでもらえるデザートなど、沢山の料理が掲載されています。しかし、ただの料理の本ではないのです。次の「おいしく、楽しくいきいき介護食！」の章では、〝食べることの大切さ〟〝お年寄りのからだの特徴（どんな変化が起こるか）〟〝消化・吸収、味覚・嗅覚・視力の変化〟〝食欲・嗜好の変化〟など身体的な問題や〝栄養素・献立のバランス〟〝食生活リズム〟など栄養や食生活の問題についても適切なアドバイスがされています。さらに「介護の食事づくり」の章では〝高齢者の疾患と食事〟〝やさしさをかくし味に〟〝介護食のメニュー〟〝介護食の食事テクニック〟と続きます。

「さあみんなで楽しく！」という最後の章では〝食事の介助について〟〝栄養補助食品一覧〟〝栄養補助食品の入手先リスト〟という具合に、至れり尽くせりの情報が盛り込まれています。

食べ物を誤って気管に吸引することを〝誤嚥〟といい、窒息や嚥下性肺炎の原因になるので極めて危険なのですが、このような場合の食事の工夫や、ふだんの家族の食事から展開できる食事の作り方など、特に家庭介護に役立つものばかりが紹介されています。

一般に流動食といえば、いかにもまずそうな色合い、変化のない水分の多い食事、を考えがちですが、いかにも美味しそうな食事を見て食欲をそそられる方も多いことでしょう。

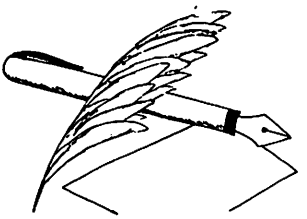
一口でも食べることによって生きる気力を回復する方も多いのです。

著者の西原修造さんは、在宅ケアで著名な高松保健所の医師ですが、もうひとりの著者である田中弥生さんは、本学家政科食物栄養専攻出身の管理栄養士です。

田中さんは卒業後すぐに南大和病院に勤務、現在栄養科長の職にありますが、訪問栄養指導を担う病院栄養士としての先駆的な活動、全国に注目され、臨床栄養専門家として、雑誌の執筆や講演にも大活躍中です。

なお、田中さんには、本学学生の学外実習でも長い間お世話になっていますが、いつもにこやかに、時間を惜しまずに後輩の指導に当たって下さり、感謝しています。

このような同窓生の活躍に皆様もぜひエールを送って下さい。きっと他にもいろいろな場で多くの方が活躍されていることでしょう。ぜひ、ご一緒に喜べる情報をお寄せ下さい。



# 香葉室

この欄は，卒業生の皆様の消息，感想文，等の発表の場として用意いたしました。今回も引き続き，昨年の講演会出欠通知から無断で転載させていただいておりますが，短大香葉会「香葉」編集局宛，次号への原稿などお送り頂ければ幸いです。

## 悲しい別れ

母八十二歳・娘五十二歳ともに障害を持つ親子、親戚縁者まったくなし。

「お早ようございます！いいお天気ですよ。さあー入浴車が来ますからね、お尻きれいにして、お風呂入りましょうねえ」

あらっ？何時ものように「早く上がって来て…」と、奥の部屋からのいつもの声が聞こえない。

「今朝はどうしたの、まだ眠たいの？元気がないですねえ」

「ヘルパーのおばちゃん、お母さんまだ寝とうよ」

まさか、お風呂の日を楽しみに、必ず早起きしているのに…。

毎度するあいさつの握手の手が冷たい。呼吸がない、脈がない。

顔は穏やかに寝ているように見える。頬に少し温くみがあるが、冷たい。

大変！救急車に・非常ボタンで緊急連絡先に、病院に・協会に…。

その内に娘は興奮して、外に飛び出そうとする。

私は片手で電話をかけ、空いている手と足で娘を抑え、「外に出たら危ないのよ、ひかれたら困るでしょ。ちょっと待ってね、すぐ救急車が来るからね、お母さんを助けなくてはいけないのよ」

人口呼吸を続ける救急車で病院に着く。短時間のことだったのに、長く思える。

「どうぞ助けて下さい、お願いします」主治医の先生に看護婦さんに、叫ぶようにお願いをする。

……

「残念でした。眠りの続きのままで、苦しんでいませんよ。ヘルパーさんの訪問日で良かったですね」病院の先生はじめ病院の皆さんが私たちを慰めてくださる。

もの言わぬ人となった対象者とともに、家に帰って来る娘は「家に着いたよ、早く目をさまして！起きて！」と、何回も母の頬を叩く。

私はもうたまらなくなり、その娘を抱き締め「お母さんはもうず～っと目をあけないのよ。気持ちよく寝ているのよ。お願い我慢してね。」

慰めながら部屋を片付け、今夜の通夜と、明日の告別式の支度を済ませ自宅に帰る。

協会に報告の電話を入れる。課長から「お疲れ様、今夜はゆっくり身体を休めて下さい。

本当に良い活動を有難うございました」

心強いご指示に感謝しながら、受話器を置きホッとすると、緊張が緩み座り込んだまま、初めて溢れ出る涙を抑えることが出来なかった。

「奥さん（対象者からこう呼ばれていた）泣かないで、あなたが来てくれる日に、仏様のもとに行きたいと言ってたでしょ。祈ってたとおり、奥さんが来てくれた月曜日にお迎えがきたの。泣かないで、元気だして、一人残った娘を頼みますよ。」

「奥さんを待っている人の家に、泣き顔で行ったらいけんよ、さあ―元気に頑張って。」

そうだ明日また活動しなくては…。

「お早ようございます。お元気ですか？」前向きに明るく楽しく仕事しましょう。それが私の生きがいです。

……ヘルパーになっていて本当に良かった。でなければ、こんな心打たれる体験は得られなかったことだから…。

（英2　元広弘子）

九州に生まれ、横浜、大阪、東京、札幌、東京、埼玉、横浜と、目まぐるしく民族大移動を強いられ、九年振りに、第二の故郷札幌へ落ちつき、久し振りの雪との戦いが終ろうとしています。昨年は、三十年振りに横浜での生活、それも十ヶ月余、昔の仲間と旧交を暖め、恩師の烏越先生とおめにかかる機会を得、母校、金沢八景周辺の変り様に驚かされてしまいました。その折、友人に誘われ立寄ったのが、事務局、原稿を書く羽目になった次第です。近況という事なのですが、日本は余りに長い国、「春を記す」と本の届く頃には、短い夏が終り、又冬支度に取りかかっていることでしょう。春―北国の春は三月の中旬をすぎますと俄然勢いを増し急速に雪解けが進みます。大地を覆っていた真白い雪の下から余り有難くない置き土産が顔を出しがっかりしてしまいます。それでも近郊の山肌に、綿帽子か、白い蝶が舞っている様な白い斑点が見うけられます。春一番に咲くキタコブシという花だそうです。春を感じつつも一夜あけると銀世界という日が三月下旬まで続きます。まだまだ春爛漫とはいきませんが、春はすぐそこまで、五月の花の季節が待ち遠しい今日此の頃です。

（家政12　奈良岡純子）

いつも香葉をお送りいただきありがとうございます。卒業してから十年近くがすぎ、結婚記念日も四回目を数えました。主人の実家に一九九四年三月より同居しています。義母がとても可愛がってくれていて、なんだか娘になった気分…。今は習字、料理、そしてコーラスのサークルと本当に好きなことをやりつつ読書も忘れていない毎日です。主婦業は主婦業なりに充実しています。皆様はいかがでしょうか?!

（国18　武田由紀子）

毎年上市先生の「覚え書」を楽しみに読ませていただいております。昨年は私の実家の名前が出てきて驚きました。鎌倉では二番目に古い旅館でしたが、三年前に建物もこわし、営業もやめました。昨年、卒業して初めて短大祭を見学しながら講演会に行き、新しい校舎そしてチャペルを見学する事ができ、うれしく思いました。（私の短大の時には短大専用のチャペルはありませんでしたので）帰りに卒業生の部屋でコーヒーをいただき、手作りのかわいいクリスマスの小物を買って帰ってまいりました。

（家12　岩野由美子）

中野教会の幼稚園へ移って、早や三年目、息子も小二になり、学校・学童へと元気にかよってます。ここまでの守りに神様に感謝す

る毎日です。地域的に園児が減少し、幼稚園も大変な時ですが、保育者一人一人が神様から与えられた大きな力を信じ、細々ながら頑張っています。子供たちの未来に希望をいだきつつ…。

（幼6　辺土名尚子）

香葉が送られてくると毎年ただ学べた時代をなつかしく思い出します。卒業してから早いもので十数年、その間ほとんどずっと仕事を続けてきました。今一度、自分の保育を振り返り、深める時がそろそろ欲しいなと思うこの頃です。しかし、現実には二部の専攻科は少なく、無給で学費を出す余裕のない私には一部で学ぶ事は夢のような話です。子どもと関わると自分が問われます。すべて自分に返ってきます。自分を知るそんな場ができる場があると良いなと求めているこの頃です。

（幼7　中村仁美）

友人からの誘いを受け、「大庭みな子先生講演会」に出席させていただく事にしました。卒業以来、初めて訪れる短大、とても楽しみです。私達の就職活動の時も、バブル前で、今年程ではないにせよ厳しい状況でした。運よく第一志望の企業に就職する事ができましたが、理想と現実のあまりのギャップに、四年と少しで今の職場に転職しました。おもしろく、やりがいのある仕事で、結婚した今正社員として勤めております。

（国19　峯岸綾子）

香葉No.23うれしく拝見いたしました。中でも「図書館から…」という奥村さんの文章にはとてもありがたく、胸が熱くなる思いでした。「卒業生も心いくまで利用しようではありませんか」という嬉しいお誘いが書かれていたからです。現在はチビ二人を抱え、なかなか伺えませんが、「下の子が入園したら、時々勉強に行かれるかな…」と思うと、楽しみが増えました。その時はどうぞよろしくお願いします。

（英30　石渡朝子）

能代市の保母として勤めて早や十数年。その間に長女（年長）長男（年少）にも恵まれながら保育所勤めに頑張っております。人口五万七千人のこの能代市に関東学院女子短大幼教時代の同級生、勝長あかねさん（旧姓高橋）が嫁いできて、今でも時々デパートなどでお会いすることがあるんです。そのたびに短大時代が思い出され、なつかしさいっぱいです。一時期いっしょにお仕事したこともあります。幼教時代の友だちと秋田の田舎で会えるなんて最高にうれしいです。

（幼6　林　里美）

秋は確実に急いでやってきた今も、今年の夏の暑さは身体から離れない。一生忘れられないだろう。我慢すること！工夫すること！がんばること！を忘れかけていた私には試練のように思えていろいろなことを考えさせられた。四月に長女を出産し、乳飲み子との夏の生活は汗だくだった。人の子ではなく、我が子の育ちに取り組み始めた今、新たな姿勢と意欲をしっかり持って過ごしていきたい。いつまでも生き生きしていたいから…それを我が子にも伝えたいから…愛娘の瞳を見つめるたびに力がムクムク出る日々です。

（幼12　室田淳子）

子供も五才と二才になり、すっかり落ち着いてしまいました。十月二十九、三十日には是非伺いたいものの、どうなることか…。栃木に住み六年、八景にも足が遠のきつつある今日この頃、近いうちに一度は母校を訪れたく思っています。

（英33　柴田祐子）

上の子供の大学入試がぼちぼち始まります。自分の時のことを棚に上げ、「もっとがむしゃらに勉強しないと後悔するんじゃない」なんて、つい言いたくなっています。高三（女）中二（男）夫と犬一匹、Jリーグが始まってから、水、土はサッカー観戦（含テレビ）で大忙しです。『親子の断絶』我家には関係ないことばのようです。　（国4　工藤和子）

昨年四月から社会へ復帰しております。やはり福祉系の仕事で、身障者のデイサービスにてPT・CTの介助などをしています。今年二月には念願の介護福祉士の国家試験に受かり、ケア・ワーカーとして働いてます。子供がまだ幼いのでパートとしてですが、いずれは常勤として働きたいと思ってます。短大へそのうち遊びに行きたいと思っているのですが…。　（幼10　金子千登世）

郵便受けに短大からの封筒を見つけた瞬間、「何か私、悪いことでもしたかな。」と心配になりました。しかし、びくつきながら封を開けると香葉会の会誌ではありませんか！自分への自信なさに笑ってしまった次第です。初めて郵便で届けられた会誌は、カットを描かせて頂いた時の思い出から、先生方や友人達、講義…多くのものを思い起させてくれました。来年も会誌を楽しみにしております。　（国27　勝山　篠）

「香葉」が毎年この時期届けられますのを楽しみにしております。主人と共に読ませていただいています。母校も少しずつ変わっていくことを感じ、特にアジアより留学生が来ておられることは活気あふれることと思っています。（中国文化と中国語を学んでいる私にとり嬉しいことです。）就職し、結婚しても母校で学んだ「生活文化」はいつも私の中で活かされているものだと、今は子育てまっ最中ながらも（奮闘中!!）継続中です。　（家36　森　禎子）

川崎の方からこちらへ引越しをして、十ヶ月余り経とうとしています。長女も来年四月に入園のため、今年は幼稚園捜しやらに忙しく、ゆっくりと子供と時間を制限なくもてるのも、もう半年余りと思っていろいろ出歩いております。長いようでアッという間の子育てです。わずか生後三〜五年の子供との接触の時期は大切にした方がよいなァと感じております。　（家29　阿部恭子）

主人の転勤で大阪に引越して一年が過ぎました。慣れない地での生活に初めはとまどいましたが〝住めば都〟で今は関西の生活がとても気に入っています。人が少なく、ラッシュも渋滞もあまりなく東京では考えられない生活です。しかし、テレビで東京や横浜が映るたびになつかしく思い、東京に帰れる日を楽しみにしています。　（国18　山下由紀子）

娘が二才の時に始めた絵本の読みきかせが母親である私の方を夢中にしてしまい、本屋へ行くと、まず絵本コーナーへ足が向き、図書館は児童書がある所しか利用しないというありさまです。そのおかげか、今年小学生になった娘は国語の教科書をとても上手に読んでいます。本が好きな子になってほしいと思います。今でも夜、寝る前のわずかな時間は娘と私をお話の世界へ運んでくれる楽しいひとときです。いつか娘を連れてなつかしい母校を訪ねてみたいと思っております。　（国13　古屋智美）

# 訪問記

第二回目の今回は、横須賀で料理教室を開催し、『魚藍亭』『番屋』の経営をしていらっしゃる、英文科十一回の大河原晶子さん（旧姓　一宮）をお訪ねいたしました。

地図を見ながら、京急横須賀中央駅を出発し、歩いて十分位。ちょうど中央駅と汐入駅の中間地点の山の斜面に『魚藍亭』の看板。活魚料理のお店らしい大きな船の錨。中に入ると地下に活魚の生け簀とカウンターと小部屋、暖かい木の温もりと、暖簾の日本的な雰囲気。上の階では、宴会ができる部屋も多くありました。

大河原さんは、お忙しいなか、午前の仕事を終えて、私たちの取材に、応じてくださいました。

二十八才の頃から、ハンバーカーの店を始め、父親から居酒屋『天国』の店を引き継ぎ、『番屋』という北海料理屋、野比でしゃぶしゃぶの『三浦一族』を開き（現在は閉店）、本町の隣の緑が丘に活魚料理のお店を開きました。

小さい頃から父親の影響で、料理が大変好きで、いつか料理教室を開いてみたいと思い、四十才になってから本格的に料理教室に通い出しました。（それまでも教室には通っていましたが。）二～三年、基礎を学び、店を営業しながら料理教室を開催しました。現在では、生徒さんが百余名もおり、毎回、旬に合わせた料理を、教授されているそうです。また、主婦と生活社から何冊か（協賛出版）発行されています。いずれご自身のオリジナルの本を出版される予定だそうです。

一日は朝九時から百五十人位の手作り弁当を作り各会社・学校などに宅配し、午後は、明日の準備、料理教室と、夜は、『魚藍亭』で女将を務め、清掃から皿洗いから板前からと幅広くたち働いていらっしゃいます。休日は正月だけ、後は毎日お店に出ていらっしゃるそうです。バイタリティあふれる女性だと感じ入りました。取材中も、手作り弁当のお店の方々が昼食を終えて戻られる時も、やさしい言葉をかけられていらっしゃいました。

『魚藍亭』は昭和六十年に叔父に頼まれ引き取った土地に開店し、ちょうどバブルの絶頂期で活魚料理として大当たりしました。平日は近隣の方（サラリーマン・主婦等）休日には家族連れと賑わっているそうです。また、メニューも大変豊富にあり、色々な味が楽しめるようです。大きなお店ながら、とても家庭的な雰囲気で女将を中心に、家族で働いているようなお店でした。常連さんも多く、温かな雰囲気を味わいに訪れるのではないでしょうか。また、横須賀という立地条件で、横浜や近隣都市より、安く楽しめるようにと、工夫をこらしているようです。また、近々、『番屋』を閉め、『魚藍亭』から近く六百坪ほどの店舗（六百人収容）を構え、中には常時使用できるビアレストランを建築中です。全てのお店・教室を近くに集め、自分のあいた時間を有効に活用できるようにと、従業員にも時間を有効に使えるようにと考えていらっしゃるようです。

毎日を楽しく明るく、店で働かれる姿は、天性のものかな?と思われる女将さん。もし皆さんが、横須賀にお出掛けの折は、是非、立ち寄ってみてください。温かな笑顔が迎えてくださるでしょう。

# クラス会報告

## 戦後五十年目のクラス会

最近、日米経済摩擦の勉強の流れで「吉田茂」に関する文献を読んでいて「林譲治」と言う名前を見つけた。此の名前をみて私たち二部の光畑先生の英作文クラスの期末試験を思い出した。その時の課題は朝日新聞「天声人語」の翻訳で"林譲治は、富士山をどてらを着て登るような人である"と言う部分があったのだった。その時は三時限でもあり、時間無制限、かつ参考書持ち込みOK試験だったが、「懐ろ手」など翻訳の手がかりがなくて大変困った。

そんな我々の実力を哀れんで下さり、夜の三時限目の授業後に教室に残って特訓して下さった。ある新聞より引用した文例の英訳を数人の学生が一人ずつが、黒板に自己の訳を書いて後、先生が、全員の前で一人ずつの英作文を推敲する手法で教えていただいた。

これは、一生役に立った。とはいえ、米国で教わった「論理を段階的に作ってから英文を書く」と言う大学での基礎作文技術は、在学中でも身につけるには苦労した。この作文手法は、「起承転結」の日本では容易に理解してもらえない。通常私の英文は、相手の外人には良く理解してもらえるが、日本語原稿の語順に忠実でないと日本人に言われたりする。ライシャワー元駐日大使も著作の日本人論の中でこの事に触れられている。併し最近の日本の新聞によると米国経済政策担当の高官は、日本の高級官僚と英語で討論してもしても負けることがあるらしく、問題は単純でない。

英語との付き合いは未だに続いており、変な行きがかりで仕事を英語ですることが今も多い。卒業後五十年近く、いろんな國で書かれた英語を翻訳しているが、未だに私の英語力向上の将来目標はつきることがない。例えば最近米国の進学クラスの高校生用の単語カード八百枚を送って貰った。殆ど知らない単語ばかり。例えばalacrityなどである。

先日釜利谷校舎の退官講義でお目にかかった小滝教授によれば、私たちのクラスは大変変わったクラスであったらしい。「皆さんは良く英語を使って仕事をしていられる」とも言われた。

私事とはいえ、勿論、私は説得力のあるりっぱな修辞句付きの英語を必要に応じて幾つにも書き分けられるほどではない。大抵は、日本語の原稿の論理のおかしさに苦しめられてしまい、ワープロの上で自分だけ用に途中の英文原稿に仮主題を入れて書いて、納得してからそれらを外すこともする。大体技術文書の時には、普通の辞書に頼ることが出来ないことが多いし、米国以外、例えばドイツが相手でやる時には、ドイツ流英語や日本流英語のやりとりによる誤りが生じたりすることもある。日本に長く住むドイツ人に聞いても専門が違うと、原文を英語でも説明してもらえなかったことがある。国際電話でスピーカー

付きの会議電話でも通じないこともあるがこれは会話力の問題もある。

さて私は最近仕事とは別に、香葉会名簿の資料更新の為にお手伝いした。当時の手書きガリ版の我々同級生名簿は、殆どの勤務先が進駐軍関係で占められていた。今となっては、それらの情報では現住所確認の手がかりにならない。戦時中の軍関係学校の当時の教育のように密接な人間関係の時には三十人ぐらいなら全員の本籍地や出身学校名を空で覚えるほどの間柄なら何とか成ると思うが、今度の場合はその経験があてはまらない。

そんななかで最近卒業以来二回目のクラス会を開催した。残念ながら先生方は都合が悪かったが、十三名ほど集まった。その後阪神大震災に被災した井上君、アトランタの大学に留学した竹内さん、毎日日替わりメニューを作っている丹羽君、良く聖書を読んでいる土山さん、藤田さん、海外によく出かける服部さん等など、此処にその時の写真をお見せしたい。勿論、カナダの堀さん、九州の権田さん、富田さんからも近況を頂いた。今度は学校でお忙しい伊與木さんの代わりに中村武雄さんに参加して貰って、違う人脈を調べたい。次回は「開催通知」を広く出して、なるべく早い時期に第二部一期から終わりまでの全体のクラスとの連携をまづとりたい。

英II 1　小林守信

## 同期会報告

卒業して三十六年間を歩んで来た平成六年八月二十日、新築された横浜テクノタワーホテル三階「あやめ」の間にて午後五時半より十三名が出席（内七回卒の小島美浹氏及び高橋宏氏が特別参加）され、実に有意義な時間を過ごす事ができました。

食事をしながら各人の歩み及び近況をお聞きし、ユーモラスで温かい雰囲気のうちに、在学中にあった初めて耳にした甘くてちょっぴりすっぱいエピソードが飛び出し、自然にお互いの顔に笑みが浮かび楽しい一コマもありました。卒業後、教育を初め各業界に於いてご活躍され、今なおその道で力を注がれて居られる方々に大きなエールをお送りいたします。皆様方が一生懸命に努力され歩んで来られたお姿に対し胸に熱いものを感じ、自分自身の事のように嬉しく思いました。

時計の針が動いているのもわからない程、カラオケ大会は楽しく、その上すばらしい親睦のひとときで、当夜は金沢で花火大会があり、窓越しに高く上ったきれいな花火が見えちょっぴりロマンチックな夜空でした。

時計は早、午後十時を過ぎましたので、名残り惜しく第三回目の親睦の時に幕をおろしました。

帰路、八景島駅より花火見物に来られた浴衣姿の人々が多数乗り込まれ、あたかも通勤ラッシュ時を思わせる程の混みようでした。

私たちの心と心が触れ合うすばらしい親睦の和をいついつまでも持ち続けて行き、今回ご都合が悪く参加出来なかった方々も、次回は一人でも多く出席され大きな輪になれば幸いと存じます。次回より第七回卒の方々と合同で同窓会を持つ事に決定しましたので、多くの方々のご参加がありますようお待ち申し上げます。

英II 6　伊藤　進

## 五月会報告

今年の五月会は島根県出雲ですることになり、旅先で初めてのクラス会となりました。と申しますのも、昨年の五月会に私が、出雲より参加いたしまして、来年は出雲でクラス会をしたら如何ということになり、決まりました。幹事を引き受けたものの、無事出来るか不安でしたが幸い横浜の連絡係を加藤さんにお願いできましたので助かりました。遠い町ですので無理かと思っておりましたが、十人参加ということで嬉しく思いました。出席者は、遠くアメリカから、又九州、奈良といろいろでしたが、予定通り、時間に集合でき、すぐ観光に出発。宍道湖沿いにバスを走らせ安木市の足立美術館に行き、美しい庭園を眺め、時の経つのも忘れてしまいました。次に松江に行き、お城に登り、皆元気なのに驚き、その後、小泉八雲記念館を見学し、その昔八雲の「耳なし法一」を学んだことを思い出しました。武家屋敷を見て出雲に入り、ワイナリーで、ぶどう酒を試飲し、ご機嫌で日御崎へと向かい、経島(ふんしま)でウミネコの乱舞するのを見て、宿に着きました。夜は日本海の海の幸、鯛の生け造り、ウニ、カニ等々に大満足。窓から星空を眺めつつお話はつきませんでした。翌朝、宿の船で海から灯台や島々を眺め、船上で、灯台守や海の歌を合唱し学生時代に戻ったようでした。午前中、出雲大社、出雲の阿国の墓へ行き、出雲そばを頂いて、伝承館を見学し、予定のコースを終りました。夜行のバス出発まで時間がありましたので、私宅で一休みして頂き、ここでも話はつきず、続きは次回の五月会ということでお別れしましたが、皆さん喜んで下さいましたので幹事としましては大変嬉しく、感謝しております。来年は何処になりますやら、今から楽しみです。お互い健康で再会出来ますことを祈っております。

英2　藤原具子

## 短大英文科Aクラス三回生
### クラス会開かれる

平成六年十一月十三日（日）上市二郎先生、門根静子先生、小滝奎子先生の先生方をお迎えして、横浜高島屋六階のミーティングサロンでクラス会が開かれました。中国料理（南国酒家）を囲んでの会は上市先生の乾杯ではじまり、三人の先生方のお話しを伺いながら、お互いの近況消息やら学生時代のことなど、予定の二時間は、ほんの一瞬のような気がするほどなごやかに過ぎ、たまたま今回の参加者が少ないことで始まるまでは心配していたクラス会でしたが、少なければ少ないなりに、落着いた雰囲気でできたことを嬉しく思いました。先生方のお元気でご活躍の様子を拝見いたし、とても励みにもなった会でもありました。

稲木・佐川・小出文子（記）

木々の枝にうす緑の若葉が次々に芽ぶき、種々の草花が色とりどりに咲き乱れ、心はずむ春、五月十二日、鎌倉が一年で一番美しいこの時期に、鎌倉山ローストビーフの店にてクラス会を開催いたしました。

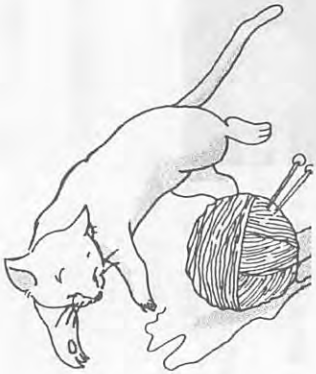
遠くは北海道から駆けつけて下さった方も加えて総勢十七名の出席でした。

友や恩師の消息、家族や趣味の話に、熟年

パワーを爆発させておしゃべりに興じ、アッという間の三時間でした。

場所をかえての二次会にて、三十八年卒の私達の会の名前を持ちましょうという事になり、村岡さんの提案で、校章にヒントを得て、「オリーブの会」と命名し、来年に再会を約しておひらきにいたしました。

家38　新谷淑子



## 国文科創立三十周年の集いのお知らせ

歳月人を待たずといいますが、来年、国文科も創立三十周年を迎えることになりました。この節目になる年に、短大のキャンパスに集い、巣立って行った仲間が、一堂に会することは、意味深いことだと思います。

まだ各期ごとの発起人も世話人も誕生していませんが、ひとりでも多く人に顔を揃えていただくため、僭越ではありますが、短大に席を置いているもので、早めに場所だけは確保いたしました。

素敵な集いをするため、お力添えいただける方を募っております。なお、何かよいアイディアもありましたらお知らせください。校歌の披露や岡松先生のお話等を予定しています。連絡は、国文科演習室までお申しつけください。

最後に、現在決まっていることを記しておきます。

**記**

日　時　来秋十月十九日（土）
会　場　母校チャペル
　　レセプション会場は折衝中
会　費　未定（負担にならない範囲）

## 合同同窓会報告

平成七年六月二十七日（火）相生本店に於いて関東学院同窓会代議員会（総会）が開催されました。学校側からは、内藤理事長・石田院長・小玉学長・平塚校長・永野校長が参加され、現況をお話しされました。

昨年の規則改正により、代議員会と名称が変り、参加人数も各部会八名ずつとなり、新しい合同同窓会となりました。

今回は、我が会より相吉副会長が議長として選出され、平成六年度の事業報告・決算報告・慶弔規程報告・各部会報告等の報告事項を受け承認されました。審議事項に入り、平成七年度、事業計画・予算等、満場一致で決議され、今年度がスタートいたしました。

## ※香葉会室移動※

1号館504号室よりルッ館へ香葉会室が移動いたしました。

# 母校ニュース

〈新任教職員紹介〉

富岡幸一郎先生
国文科　専任講師
近代文学演習、比較文学1担当
中央大学文学部卒業

杉山久仁子先生
家政科　専任講師
食物学実習II、食環境実験担当
東京大学大学院修了

高橋　友子（ゆうこ）さん
教務課　事務職員
関東学院女子短大幼児教育科　平成六年三月卒業

〈林淳三先生、名誉教授に！〉

元学長、家政科の林淳三先生は、永年に亘るご功労と多大な業績により、四月六日（木）短期大学より名誉教授の称号を贈られました。

〈経営情報科、渡辺利夫先生急逝〉

四月十日（月）経営情報科講師（簿記・税法担当）渡辺利夫先生がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 創立五十周年記念行事についてのお知らせ

平成八年六月一日（土）は、昭和二十一年に女子専門学校が開校して五十年を迎えます。当日は記念式典他、午後からチャペルに於いて、鈴木寛一氏（テノール歌手）のコンサート、幼児教育科18回卒（平成四年）建石直子さんのパイプオルガンの演奏を予定しております。

詳細は香葉会にご連絡下さってお出かけ下さい。

（鈴木寛一氏略歴…東京芸大卒、二期会会員東京芸術大学教授・オペラ・オラトリオ歌手として活躍中）

## 〈県央のつどい〉御案内

15回目を迎える県央のつどい。毎年少人数ながら香葉回のメンバーを迎えることができました。今年も一人でも多くの参加をお待ちしております。

日　時　11月25日　午後5時30分より
場　所　厚木ロイヤルパークホテル
連絡先　紙透洋子まで（夜8時以降）
〇四六二―五五―八〇七九

## 編集後記

昨年度の二月から編集会議を始め、依頼・レイアウト・校正と編集委員の皆様の力を借りて、無事に24号を皆様の許へ送り出すことができました。

来年度は、創立50周年・国文科30周年と記念行事が目白押しです。卒業生の皆様の多数の参加をお待ちしています。又昔の思い出など『香葉』にも御参加下さい。委員一同お待ちしております。（葛）

| 平成6年度決算 | | | | 平成7年度予算 |
|---|---|---|---|---|
| 収入の部 | 予算 | 決算 | 増減 | 予算 |
| 会費 | (@18,000×949)<br>17,082,000 | 17,082,000 | 0 | (@18,000×931)<br>16,758,000 |
| 賛助金 | 500,000 | 846,300 | △ 346,300 | 500,000 |
| 預金利息 | 5,000 | 6,489 | △ 1,489 | 5,000 |
| 雑収入 | 5,000 | 44,611 | △ 39,611 | 5,000 |
| 前年度繰越金 | 4,243,532 | 4,243,532 | 0 | 4,340,776 |
| 合計 | 21,835,532 | 22,222,932 | △ 387,400 | 21,608,776 |

| 支出の部 | 予算 | 決算 | 増減 | 予算 |
|---|---|---|---|---|
| 通信費 | 3,000,000 | 1,757,914 | 1,242,086 | 3,000,000 |
| 印刷・製本費 | 2,000,000 | 1,568,783 | 431,217 | 2,000,000 |
| 総会・会合費 | 2,200,000 | 1,608,472 | 591,528 | 2,200,000 |
| 交通費 | 500,000 | 390,420 | 109,580 | 500,000 |
| 用品費 | 600,000 | 34,711 | 565,289 | 1,200,000 |
| 備品費 | 200,000 | 116,749 | 83,251 | — |
| 委託費 | 700,000 | 449,675 | 250,325 | 500,000 |
| 謝礼費 | 200,000 | 65,544 | 134,456 | 100,000 |
| 消耗品費 | 100,000 | 30,890 | 69,110 | 100,000 |
| 人件費 | 3,000,000 | 2,720,700 | 279,300 | 3,000,000 |
| 合同同窓会分担金 | (@300×949)<br>284,700 | 284,700 | 0 | (@300×931)<br>279,300 |
| 新入会員歓迎費 | 1,500,000 | 1,355,480 | 144,520 | 1,500,000 |
| 慶弔費 | 700,000 | 525,983 | 174,017 | 700,000 |
| 寄付金 | — | — | — | 200,000 |
| 雑費 | 50,832 | 11,422 | 39,410 | 29,476 |
| 予備費 | 300,000 | 460,713 | △ 160,713 | 800,000 |
| 特別会計 | 2,500,000 | 2,500,000 | 0 | 2,500,000 |
| 名簿発行準備金 | 2,000,000 | 2,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| 奨学金基金 | 2,000,000 | 2,000,000 | 0 | 2,000,000 |
| (小計) | 21,835,532 | 17,882,156 | 3,953,376 | |
| 次年度繰越金 | 0 | 4,340,776 | △ 4,340,776 | |
| 合計 | 21,835,532 | 22,222,932 | △ 387,400 | 21,608,776 |

## 賛助金をご寄付くださった方へのお礼とお願い

今年も後記の方々から総額「八十四万六千三百円」をお送り頂き、厚く御礼申し上げます。諸物価の値上げにより、年々「香葉」の発行がむずかしくなってまいりましたが、卒業生唯一の雑誌を存続したいと、編集委員一同がんばっておりますので、今後共賛助金のご協力をよろしくお願い致します。

一九九四年度賛助金寄付者（敬称略）

鈴木光代　野牧その　田辺芙紗子　徳江奈美
月本鈴子　伊藤　進　福島美和子　中山暁子
吉田澄子　松本久子　鈴木美佐子　相吉典子
飯吉玲子　天野京子　武田由紀子　高山政子
馬渡正恵　松田初枝　錦織マサ子　菊地庄吉
菊地利子　岡部孝子　濱田二三栄　平井道子
松浦きぬ　大坂恵子　日原美登理　小出文子
村上節子　菅野弘子　高橋美佐子　池田理恵
中里玲子　鈴木久恵　中野ノブ子　山下文子
八木直子　森　禎子　谷内伊知子　間島道子
須藤和子　原由美子　井上多恵子　設楽栄子
菅原修子　稲垣愛子　鈴木恵美子　山本吉枝
石田禎子　関根幸子　菊池美智子　飯田染子
古城房子　佐藤美代　宗像なはみ　阿部典子
安彦潤子　吉屋保子　八木智恵子　岡崎敬子
柳生二三　相原梅子　二本木篤子　志賀ミチ
中西愛子　小林　麗　馬屋原麻里　雨宮慶子
坂井満代　村井英子　千川奈緒美　三瀬文子
岩本文子　木村燁子　三浦美和子　吉川雅子
中村浩子　松友明美　森野恵理子　山本美子
明石昌子　山本長生　片岡いつえ　出榮美子
山崎恵子　小松照代　小林三恵子　織田明美
大島好恵　渕上龍美　羽太とし子　羽田高義
金子ちよ　高橋静子　芦部九女夫　上岡町子
上倉幸代　細田節子　竹内恵美子　丸山勝代
春原真紀　菅野富予　中野みはる　石川明美
寺内雅子　西山澄子　五十嵐節子　荒木美絵
藤原史子　押野澄子　黒川まり子　渥美彰子
森　静恵　中村武雄　佐々木明子　高橋洋子
鈴木熙子　梅田優子　吉田由美子　園田靖子
山田信保　山崎裕子　吉原千恵子　荒井静子
桜田幸子　伊藤陽子　高斎香代子　松永政江
菊地和子　西尾和弘　梅山フク江　高木良子
堤　由美　内山紀子　清田惠美子　積田昌子
土山　忠　石渡朝子　石井キヨミ　熊谷君代
岡田温子　臼田修良　菅原千代子　宮本駒子
徳江美和　徳江奈美　大門里実子　柳澤裕子
小峰節子　足立求子　松野トシ子　芝　久江
多田祥子　西尾文子　松本智恵子　平間敦子
土屋律子　勝又恵子　高橋美知子　大坪順子
杉山愛子　岡部良子　古畑美佐子　矢田宏子
古郡綾子　玉木宮子　福田しほり　古賀恵子
石井明美　浅葉勝美　光畑　清　鈴木利治
千葉芳子　鈴木幸子　平林園江　須田広子
柁原礼子　松田良子　渡辺美和子　矢野紀子
鈴木美穂　鈴木育子　飯塚まり子　平野康子
石川早苗　杉浦睦子　小嶋さとみ　坪井　昇
露木宏子　小野和子　細谷さとみ　岩崎康代
井田玲子　小田牧子　柳田美智保　田辺洋子
小林守信　井上春水　工藤ひろみ　中島ひろみ
門井正弘　岩野由美子　藤田淳子
鈴木茂子　鶴見智子　寺岡利子
加藤紀子　江波戸房子　平井初枝
村岡愛子　三代川典子　宮川洋子
川島久里　増田安喜子　陶山正代
家本佳子　山内奈緒子　篠本和子
長尾とし子　茅　昌子　越智協子
納所節子　伊奥木順子　小島美浜
高橋秀子　青木昭次郎　山下栄子
元広弘子　竹内恵美子　桐原千恵
長崎洋子　佐々木晶美　タハ　茜
葛西恭子　八木橋悦子　鈴木清子
大塚道子　二見アイ子　田中久恵
小濱朝子　石井多恵子　露木典子
菅野弘恵　奈良岡純子　田牧洋子
千田節子　小出美智代　富田欣一
畠山史恵　藤原三矢子　田中和子
藤本敬子　山口恵美子　梅山治子
飯島敏子　青木千恵子　岩堀迪子
月本鈴子　荒井久美子　前田博子
太田靖子　中嶋貴美子　益　昌子
藪内和子　平沼由美子　三田由佳
徐多恵子　川村喜代子　川村陽太郎　鈴木みどり
喜多村不二子　長谷川不二恵
川村陽太郎　後藤美和子
五十嵐増枝　横部久仁子
芳賀美佐緒　奈良喜美枝
山口奈緒子
葛城容子　平尾富子　露木球恵

（一九九五・三・三十一日迄）

## 先輩諸姉へ求人のお願い

本学卒業予定者の就職活動につきましては平素より暖かなご援助、ご協力をいただき感謝申し上げます。

学生達は将来への希望を胸に企業の扉をたたいておりますが、昨今の社会情勢の中、女子学生への門戸は大変厳しいものになっております。

つきましては、先輩方のご関係で求人のお話がございましたら就職課へぜひお知らせくださいますようにお願い申し上げます。

〒236 横浜市金沢区六浦町4834　Tel（045）787－7868

関東学院女子短期大学就職課

香葉 第24号

平成7年9月25日　印刷・発行

関東学院女子短期大学・香葉会

代表者　古城房子

横浜市金沢区六浦町4834　郵便番号236

関東学院女子短期大学内

電話《045》787－7859

関東学院同窓会・香葉会誌